

会 告

昭和五十三年度史学研究会大会および総会は、予定通り十一月一日(水)午後一時より京大会館楽友会において開催されました。公開講演は応地利明、山田信夫両氏により、次の演題で行われ、盛会裡に終了しました。

南アジアにおける農業集落研究

応地利明氏

天山ウイグル王国とウイグル文書

山田信夫氏

なお、大会・総会に先立って開催された秋季定例理事会・評議員会において、次の案件が承認・可決されました。

一、役員交代

(1) 理事豊田堯・西村睦男・林屋辰

三郎・藤岡謙二郎氏および評議員鈴木成高・澄田正一・野上俊

静・村山修一氏の退任。

(2) 理事に植村雅彦・谷川道雄・中

村賢二郎・船越昭生氏、評議員

に青木伸好・門脇禎二・千代田

寛・永田英正氏を選任。

二、「史林」編集報告

以上

史学研究会

昭和五十三年度

史学研究会大会講演要旨

南アジアにおける農業集落研究

応地利明

まずはじめに、南アジア、ことにインドにおける村落研究の歴史を展望し、問題の関心がいかに推移してきたかについて、整理を試みた。その上に立って、今夏、南インドのカルナタカ州でおこなった村落調査の結果について、報告した。

インド村落の研究は、イギリスのインド支配とともに始まるといえる。その研究史は、三期に分たれる。第一期は、ほぼ一九世紀末までであり、インド村落を孤立的小宇宙として把えようとした時期である。この村落観が有効性を失うと、孤立的・小宇宙的なインド村落は、イギリス支配により解体させられた、という「合理的」解釈が生まれてきた。

第二期は、独立までの二十世紀前半にあたり、村落の経済状況に関する調査の盛行によって特色づけられる。しかし、上述の「合理的」解釈は、依然として存続した。

第三期は独立以後であり、この期に至って、「合理的」解釈の妥当性そのものに対して疑問が投げかけられた。その結果、孤立的・小宇宙的村落観は神話と宣告される。かわって、村落をとりまく広域的な空間組織の探求が始まった。その探求は、さまざまな観点から多様な指標を用いて行なわれてきているが、全体的な把握に欠ける憾みがある。今夏の調査では、機能地域設定の立場から、この点の把握を試みた。その結果、カルナタカ州の一村落をとりまく重層的な機能的圏域として、村落間のジャジマニ制や行政・教育にもとづく村落連合、低次中心集落との関係圏域、家族レベルでの親族関係の展開圏域、ジャーティレベルのジャーティバンチャートの成立圏域を、小→大の順にとり出し、これらの諸圏域をほりくずしつつ州都バンガロールとの関係が、目下、急速に展開しつつあることを述べた。

天山ウイグル王国と

ウイグル文書

山田信夫

八四〇年滅亡したモンゴリアの遊牧ウイグル国の亡命者の中、西走した者は、一番遠くセミレチエ方面に入ったもの以外は二派にわかれ、新王国を建設した。一つは中国史書に言う甘州回鶻で、私は河西ウイグル王国とよんでいる。いま一つは高昌(西州)回鶻とよばれるもので、これを故安部健夫氏は西ウイグル国とよばれたが、私は天山ウイグル王国と名付けた。

安部博士は西ウイグル国を「帝国」とよばれるにふさわしい大国だったとされたが、それには賛成できない。基本的には、敦煌出土資料などから確認し易い、明かに独立した一王国であった河西ウイグル王国と、天山ウイグル王国とは同じである。この国は、天山南麓のトゥルファン盆地、北麓のビシュバリク地方に、天山山間のユルドゥズ盆地を領域とし、ビシュバリク・ホーチョー(高昌)・カラシャフルなどが主要都市であった。その意味では単なるオアシス

国家ではなく、オアシス農民に草原牧民、それに多数の異種族・民族をふくんでいた。

この王国史に関する研究資料は極めて不十分だが、社会経済関係については、ウイグル文書とよばれる文書資料が内容豊富で、今後活用されるべきである。たとえばカイイムトゥという人物に関する一連文書一六通は、この王国の基盤をなすオアシス農村社会の成熟した封建的構造を、如実に示していると思う。

受贈図書

(一九七八年九月一日〜十二月十五日)

前川貞次郎著 ヨーロッパ史序説(ミネルヴァ書房)

千葉県市原史地名集(市原市教育委員会)

市原地方史研究(市原市教育委員会) 九

三浦古文化(京浜急行電鉄三浦古文化研究会) 二三

人類学雑誌(日本人類学会) 八六―三

産業社会論集(立命館大学) 二〇

福岡大学研究所報 三八

経済経営論集(龍谷大学) 一八一―二

鹿児島経大論集 一九一―二

立命館法学 一三七、一三八

北大史学 一八

樋口進著 巴金とアナキズム(西南学院大学学術研究所紀要一四)

朝鮮学術通報(在日本朝鮮人科学者協会)

一五―三、四

民俗学研究紀要(成城大学民俗学研究所)

二 神道宗教(国学院大学神道宗教学会) 九〇、

九一

奈良国立文化財研究所年報 一九七八年

人文自然科学論集(東京経済大学) 四六、

四九 鹿児島大学教養部史学科報告 二七

人文論叢(福岡大学) 一〇―二

文明(東海大学文明研究所) 二四

神道史研究(八坂神社神道史学会) 二六―

二

西洋史学報(広島大学西洋史研究会) 復刊

六

文理論集(西南学院大学) 一九―一

富山県史・史料編六・近代上(富山県史編纂室)

人文学(同志社大学人文学会) 一三三

福岡大学研究所報・人文学編 三九

福岡大学研究所報・人文学編 三九

三九

三九

三九